事　例 項　目	**02 個に関する指導**　06 ケース会議
概　要	**授業中にこちらの指示や説明が理解できているのか不安がある生徒への相談**
事　例 提供校	高校：　西部地区　全日制 特支：　掛川特別支援学校

事例の内容	**高校からのリクエスト**
	・提出物や課題が出せない、何をするにもテンポが遅い、授業中の居眠り、取り掛かりに時間がかかる、機械などへすぐに手がでるため危険、時々泣いて言い訳にくる等の生徒に対して、授業を参観し、実際に本人の様子を見て助言が欲しいです。
	特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）
	・１回目　・高等学校訪問、当該生徒の授業観察をしました。 ・主訴の聞き取り及びそれに対する個の捉え方や改善策の提案をしました。 （副校長、担任、その他の関係教職員全６人参加） ・２回目　・高校等学校訪問、当該生徒の参観つまずきの拾い出しと評価をしました。 ・授業者への質問とつまずきの評価と解説、改善策の提案をしました。 ・願いの引き出しとその共通理解への介入及び組織化への提案をしました。 （副校長、担任、その他の関係教職員全６人参加）

センター的機能を活用した感想	**高校　担当者のコメント**
	・助言を受けて授業内の困り感がかなり減少しました。上手くいっている点の確認をしました。少人数や興味のある科目を少しずつ区切ってやらせるようにしました。（レポートは１日１枚ずつ実施）家庭で学習をするのではなく授業や放課後の学校の時間内でできる範囲で課題をやらせました。時間を短く区切って達成感や成就感を味あわせることが有効でした。
	特別支援学校　担当者のコメント
	・手立てで評価できる面を引き出しました。放課後残る習慣がついているのでその時を利用して指導しました。教師が指示するときは、その場でノートに記入させました。課題を他の生徒より早めに出す等の手立てを立てたことで生徒の変容が見られました。まずは、教師の見方や捉え方を変えることが大切です。

まとめ

・教師自身の困り事を明確にすること、その困り事を声にあげることで「困り事を共有できる教師チーム」ができました。「困り事を共有するとチーム」と「改善できるプロジェクトチーム」を立ち上げました。

・「改善できるプロジェクトチーム」で「つまずきの追究・分析の方法」「分析を手だてにする方法」「手立てを具体的に実践する方法」等を具体的に明示しながら現場介入する必要性があります。

・「改善できるプロジェクトチーム」が実践した評価に「それでいいんだ。」等の後押し評価をすることが高等学校での特別支援教育現場には必要だと思いました。

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。

事　例 項　目	**02 個に関する指導**　05 学校体制づくりのサポート　06 ケース会議・研究協力
概　要	**授業中、教師の話に集中して聞けない生徒への対応**
事　例 提供校	高校：　東部地区　全日制 特支：　東部特別支援学校

事例の内容	**高校からのリクエスト**
	・「注意力が散漫で、一つのことに集中できない」という特性があります。授業中、周囲に迷惑をかけることはないですが、教師の話を聞けない様子が見られました。学習意欲が低下していてやる気が出ないのかもしれませんが、「注意力が散漫で、一つのことに集中できない」という特性かもしれません。欠席日数も増えています。適切な指導について検討したいです。
	特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）
	・高校訪問、当該生徒の授業観察 ・特別支援コーディネーター、授業担当者等とのケース会議（学習意欲の低下、発達障害との関連、実態把握と学習の仕方に関する指導）中学校の内容がどこまでできているかテスト等で把握をします。

センター的機能を活用した感想	**高校　担当者のコメント**
	・当該生徒の実態把握（中学生学習内容）をすると、数学で文字を含む式（中学２年生程度）の計算ができませんでした。A さんに個別指導をしていると、正負の計算からつまずきがあることがわかりました。そこで、授業を補うために、A さんにノートを１冊用意して、計算練習から始めました。必要な時には、放課後や休み時間を利用して「計算の仕組みを理解したら、あとは宿題」という形で、１日５題を目標に取り組みました。少しずつですが、A さんは理解が深まることで、授業中も教師の顔を見て聞くようになりました。
	特別支援学校　担当者のコメント
	・学習意欲が低下している生徒は、今までの学習習慣から苦手意識を持っていて「やっても自分にはわからない」「小学校の頃から算数は苦手だったから無理」など、理解することをあきらめてしまう傾向があります。このような場合は、「やればできる」という経験を、スモールステップで達成できるように手助けをしていく方法があります。そのためには、「どこで何がクリアできないために、諦めてしまうのか」を見つけていかなければなりません。 ・高等学校の先生は、数学の授業で下学年内容の習得に向けて指導を進めてくれた。その個別の関りが B 君の学習意欲を高めることにつながったと思われます。これを機に先生との関係性も改善され欠席数も減ったことは彼の成長につながり、とてもよかったと思います。

まとめ
生徒の困り感を早期に発見することが大切です。それに気づいたら、本人と相談し、対応策をとり，実践・見直していくことが重要になります。そして、「本人が小さなことでもうまく対処できたらほめる」という姿勢で、継続して指導・支援しながらステップアップさせていくことが効果的です。

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。

事　例 項　目	01 障害の特性理解・実態把握　**02 個に関する指導**
概　要	**能力の凸凹により、人間関係が築けない。文系科目の授業に参加しないこと等への相談**
事　例 提供校	高校：　中部地区　全日制（私立高校） 特支：　静岡南部特別支援学校

事例の内容

高校からのリクエスト

・入試の点数は単願上位の成績でしたが、面接結果は良好とは言えませんでした。入学後、教員、同級生の名前を覚えず、一人でいることも苦痛ではないようです。特定生徒への興味が強く、早口、独特の話し方で興味のあることや得意分野を話し続ける傾向にあります。
・提出物（課題）が出せないことがほとんどで、教員の注意等も受けいれません。
・板書を写すことはなく、理数系の授業には参加しますが、文系（国語）の授業は空を見たり寝たりして過ごしています。

特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）

・迷惑行為と捉えず、「本人は困っている」を前提に対応するとよいと思われます。
・「特定生徒と話をするのは１日１回とする」「話をする時間を３分と決めタイマーで示す」など本人と話し合い、同意を得ながらルール作りをしていくとよいと思います。
・「人との距離」「パーソナルスペースを数値で示す」「付きまとうと相手は嫌な気持ちになる」など、可能であればＳＳＴを取り入れていけるとよいと思います。
・分かっているようで、実は分かっていないこともあり得る。提出物（課題）を出すことは、中学校時代とは意義や意味が異なると伝える必要があるかもしれません。
・板書が苦手さを情報機器（音声入力アプリ、写真）等で補うという手段もあります。

センター的機能を活用した感想

高校　担当者のコメント

・助言を受け現在、支援中。（経過が分かったところで報告をもらう予定）

特別支援学校　担当者のコメント

・数年後、大学入試へつながるケースであるが、本校は大学入試について詳しくないので、他校の特別支援教育コーディネーターの力も借りたいと考えました。そこで、地区別の特別支援教育コーディネーター研修会で、本事例について話題提供をしました。すると、本ケースのようことに詳しい特別支援教育コーディネーターがいたので、助言をもらいました。助言内容を相談校に伝えていきたいと考えています。

まとめ

県が示す高等学校と特別支援学校の連携グループ間で始まった相談ケースです。私立校と県立校の垣根を超えた相談ということでも意味深いと考えます。特別支援学校は校種や校内人材によって、持ち合わせる情報量や力量に違い（得意分野、不得意分野）があります。ただし、特別支援学校同士の横の繋がりの強さを生かし、他の特別支援学校に情報提供を求めることができます。

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。